

招待席

岡本彌太

おかもとやた 詩人。1899（明治32）年～1942（昭和17）年。高知県我美町生まれ。本名亀弥太。1923（大正12）年、25歳の時に文学仲間の勧めで小学校代用教員となり、以後、生涯を教員として過ごした。『日本詩人』への投稿を続け、雄大なスケールの「黒潮」三部作・「室戸灘附近」などの大作を遺した。南海の宮沢賢治と称えられ、早世を惜しまれた。掲載作は1932（昭和7）年刊行の第1詩集『瀧』（詩原始社）からの抄録である。なお、一部差別的な表現もあるが、歴史的な作品なので、そのままとした。

瀧（抄）

《目次》

瀧（其の参）

父の寝室 一病床篇一

桜

橋

鉛筆の走書き（妹へ 四）

椎の稚葉（妹へ 五）

三稜燈火

瀧（其の参）

一つの瀧のおとすら越へることは絶対に出来ない

何もかも

喪ひつくした私一つのからだであつても

あの

夢のあいだにもさつきうと岩をこしてゆく夜の瀧の光とはなれない

瀧のおとを瀧の石となつて聴くことは出来ない

あのたきのうちには

雲と風との間にのこつてゐる最後の稟性が

いつも厳しく鳴つてゐて

秋のよあけなどそれが短い山の人の夢に

玉のようころがつてきて暗い一生を責めるらしい

たきは

私の夢のあいだにも雪のように

夜のそらからまつさかさまに身を分ち

とても

わたしと一つになれぬ厳とした天地の声を控へてゐるのだ

父の寢室　―病床篇―

ルカコヨ　レイコヨ

ワシノカラダニハモウ　ウラゝカナ春ノ公園ガナイ

ブランコガナイ

ワシハ白イ恩愛ノ鶴ノ羽ヲスポメル

ワシハ決シテ自ラヲ美シイキリンダト思ツタコトハナカツタ

ワシハムシロ雨ニヌレナガラ歩イテキタ病メルカバイロノ牛デアルコト

ヲ欲シテキル

ワシハ動カレナイノデ

サカサマナオ前タチノウツクシイ涎ヲウケ
喘ギナガラ沁々ト反芻スル

才前タチハヤガテ白イソラノ乳ヲモトメ
一人々々ニナル厚イジュウタンノ上ニ泣クノデアラウ
私ハソノ時アタラシイ鶴トナツテオマエタチノカラダヲ
青空カラ包モウト思フヨ

光ル体温計ニカゾヘル春ノ公園ノブランコ

私ハ今コノ人生ノ目盛ノ高サヲ知ル

水銀ガ全ク下降スルトキ人ハ何デアツタカラ始メテ知りツクス事が出来
ルノダ

モウ遅イ

戸外デハ温イハルノ雨が降ツテキルノダサウダ

欠ケタオマエタチ二人ノオ茶碗ニ

アノ光ルアメイロヲウケトツテオクレ

ワシハ暗イ田舎ノ天ニタゝエテキタワシノ愛スベキ思想ヲ

欠ケタ二人ノオ茶碗ニ等分シテヂツト眺メテミタイノダ

美シイオブローモフノ雨ニ

ヤガテ空ニナル父ノ寝台ガ濡レルノダサウダ

桜

おたつしやでゐて下さい

そんな風にしか云へないことばが

さくらの花のちるみちの
親しい人たちと私との間にあつた
そのことばに

ありあまる人の世の大きな夕日や涙がわいてきた

私は

いまその日の深閑と照るさくらの花のちる岐路に立つてゐる

おたつしやであて下さい

私はその路端のさくらの花に話しかける

さくらは

日の光に美しくそよいでゐる

橋

おまへたちの家はない

おまへたちは広い雨のなかに迫る夕ぐれに追はれてゐる

おまへたちは一人のめくらの母につれられて

どこの雲のもとへ迷ふてゆくのだ

おまへたちは今一つの田舎の橋をわたつてゐる

おまへたちはその水の光のはての限りなく暗いことを知らない

よろめく闇の母のかたちと足音を玉のように信じて

おまへたちはその暗い雨の橋をわたつてゆく

鉛筆の走書き（妹へ 四）

かへらぬこのさみだれの光る日
いたむ胸おさへ
こどもたちにつらい顔みせず
遅くなつてゆく針のしごとの間からこの雨凧と眺めてみると思ふ
はるかな白い波のことなど思ふか
一つかみのふるさとの海の砂握りたいと
鉛筆の走書きが
鋭く私の胸を裂いていつた

椎の稚葉（妹へ 五）

おまへはうごかれぬ屋根うらの病のからだで
晴れつくしたふるさとの山の
椎の稚葉のむらがりを思ひ
あの紀淡の海をとばふとおもふのだらふ
どうすることもならない潮のこちらに
かたわのはらからのまなこつふる
うごかれぬおまへの瘦せたとがのなからだ
このふるさとの銀の椎の稚葉でつゝんでやりたく思ふ

三稜燈火

あまりに鋭く

私のかへりをむかへる三稜の燈火に重なる
私のこどもの雲母の眼の閃き

わたしのふところ私の掌には何もない
するどいまなこ交すだけの食卓のあいさつ
あしたの吹雪はすでにこゝに凍つてゐる

Okamoto Yatai

日本ペンクラブ 電子文藝館編輯室

This page was created on Mar 15, 2009